

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 「環境デザインの地域的特性を造形との関連性において考察する」・調査報告   |
| Author(s)    | 吉原, 卓男  |
| Citation     | デザイン理論. 2005, 46, p. 196-197  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/52860">https://doi.org/10.18910/52860</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「環境デザインの地域的特性を造形との関連性において考察する」・調査報告

吉原卓男／大阪芸術大学 環境デザイン学科

数年来、大阪に始まり、各都道府県の県庁所在地における都市空間を俯瞰することによって、都市空間における環境デザインの地域性、独自性に関わる調査研究をすすめてきた。ほとんどの都市は、第二次世界大戦時の米軍の空襲により被災し、再建された都市である。再建できたものは、近代という一元的な価値観の模式による、地方特色を無視した個性のない均質な都市空間であることを知った。戦災を免れた都市も結果的にはその後の高度成長とバブルによる都市改造で戦災と同じ一元的な近代化の様相を示している。他方で、空襲や戦後の近代化の洗礼を免れたものもある。それらの都市や集落は、僅かではあるが、独自性を失うことなく今にその姿を保ち続けている。いわゆる伝統的町並みや伝統的民家である。研究テーマ「環境デザインの地域的特性を造形との関連性において考察する」の調査対象としたものは、そのような歴史的・時間的連続性をもって形成された伝統的な都市及び集落の町並みや民家である。対象のなかには、行政（文化庁）による重要伝統的建造物群保存地区及び国指定重要文化財民家の指定物件と重複するものもあった。そしてほとんどの指定物件は、指導によって一律的な修復がなされていた。しかし、それら物件を含めて、多くの家並みや建造物に接することにより、人々の長年住み暮らし、育んできた「町家・民家」とその背景に広がる街並みの景観や自然に庶民の伝統的美意識を加え、それらとうかがい知ることができたと考えている。調査は、環境デザインの特性についての原則をたぬ偏りがないデータを取らる限り幅広く求めた。そのために、(a)、一般的に集落形成の分類において歴史地理学的に習知の集落分類と、(b)、形とか雰囲気といった感性に関わる部分で日本の伝統をよく保持し、他と区別される都市・集落についても注目した。

a 集落形態を歴史地理学的な区分法によって分類し、その環境デザインが歴史的・時間的連続性をもって醸し出された固有の「かたち」を持つもの。

1 街道筋に開かれた宿場としての集落

2 門前町・寺内町としての集落

3 港町

4 産業都市

5 在郷都市

6 城下町

b 集落の環境デザインを構成する様態が、始源の「かたち」を伝えもつものとして、あるいは固有の「かたち」をはくくみ持つもの。

これら始源の「かたち」、あるいは固有の「かたち」を持つとされる集落及び町並は、かつての海上輸送を担った船舶が利用した海の道、内陸部と平野部を結ぶ高瀬舟などによる川運の川筋に沿った川の道、或いは、いく筋もの陸の道によって、みやこ（京・江戸）の文化が全国各地に伝えられ、山々に囲われた郷や盆地で、それをつくる技術と共に土地の環境に育まれ成熟され独自の色合いを持つものとして受け継がれてきたのである。そして、この成熟された伝統文化を伝える「かたち」としての家並みや民家が創り出す景観は、いつしか「小京都」「小江戸」と呼ばれた。それはこの国の人々がもつ都市の始源の「かたち」への共通のオマージュなのであろう。調査では、様々な道と郷や盆地に注目した。パネル発表の作品は、塚本学院教育研究補助費を得て、平成13年～15年のあいだにおこなった調査（文献・現地）を基に、項目別にその特徴を報告書より抜粋しリスト化したものである。なをリストの集落・町並は120ヶ所を越える中からの一部である。

| 所在地 | 番号 | 写真 | 調査地<br>地理的位置   | 地理・歴史的形態<br>町並みの成立  | 町並（町家）の表構え<br>構成とその要素<br>その他  | 町並みの特徴  |
|-----|----|----|--|---|---|---|
| 青森県 | 1  |    | 黒石市中町・黒石市は、青森県中央部、浅瀬石川扇状地の扇頂に位置。中町地区は旧黒石市街地の中心部。               | 宿場町(黒石山形街道)…明暦2年(1656)陣屋の築造と同時にすでにあった町並みに待町・職入町・商人町を加えた町割れを行う。「こみせ」はこの時に作られた。 | 屋敷規模は多様で、間口2.8～23.6間、奥行7.8～45.5間。切妻造・入母屋造が連なり、鉄板葺き(本来、青森はヒバを用いた石置葺き)棟高の低い中二階建、妻入り、真壁造、摺り上げ戸。  | 中町通り(南北の弘前方面から青森方面へ通じる旧街道沿いに発展してきた)の「こみせ」は、江戸時代から今に残る木製アーケード状の通路(幅が1.6m前後、軒高は2.3m)。冬季、摺り上げ戸を街路側の柱の間(一間間隔)に入れ、積雪や吹雪から人を守り、軒を連ねていた旅籠や、商家にとってはなくてはならない装置となる。 |
| 秋田県 | 3  |    | 角館市……秋田県のほぼ中央、横手盆地北西部に位置。                                      | 城下町……角館町の城下町形成は、元和6年(1620)声名氏が現在地に移り住んだことに始まる。城下町割りが原形。                       | 武家屋敷の間口は、平均約18m。茅葺きの武家屋敷は建築用材として腐食に耐える短小松を使用。町家は間口を2～4間口に制限、多くは杉皮葺きの二階建てで道路に面して雪除けを設置。        | 旧武家町の広い通り沿いに板塀が連続し、塀に掛ってシゲラザクやオモミの木が深い木立を形成。幕政期末期の屋敷割を踏襲し、屋敷は茅葺きの主屋や門・蔵で構成。建設当初に領主に京の公家からの興入れがあり、京を意識した町道りがなされ、みちのくの小京都と称された。                             |
| 宮城県 | 6  |    | 村田……柴田郡中央に位置。中央部を松尾川が北西部から南流。南部は水田の広がる村田盆地、北部は山地、盆地の東西部を山地が囲む。 | 商家町……奥州街道大河原宿から北上、羽州街道の川崎宿に至る街道筋村田盆地に町場が形成される。江戸期には山花や藍を仙南地方で買い集め江戸や上方と取引。    | 店蔵造り、二階建て、切妻・平入、椀瓦葺き、置屋根形式、通りに面して一間程度の下屋庇、二階窓は観音開きの土扉、一階は通りに面して全面開放で千本格子引き戸、腰高な海鼠壁。           | 中心街の南北に通る約700mの道路の両側に古い商家が連なる。街路を挟んで短冊形の敷地割りで間口が狭く奥行き深い敷地南側に、表から奥に通じるトノリを設け街路に面して立派な門を持つのが村田の商家の典型的な敷地配置。上方との取引を通じて京を意識した町道りがおこなわれ、約2kmに宮城の小京都とも称される。     |
| 福島県 | 8  |    | 下郷町大内宿……会津若松の南方の山岳地帯にあり、会津若松から日光街道の途中宿に至る南山通りの宿場町。             | 商家町(南山通り)……敷設当初(17世紀初め江戸初期)は会津と関東を結ぶ碓氷の輸送路として賑わった。江戸中頃に足利川街道が整備、次第に廃れる。       | 茅葺き寄棟造り妻入り、街道に面した軒を「せがれ造り」又は化粧壁木で飾る。宿場時代、街道に面した妻側に二階の座敷を並べ縁側を設け、客室として使用。今は観光客に土産物を並べるミセとして使用。 | 山間部の半農半宿の集落である。街道(南北に約400m)を挟んでおよそ40～50坪の茅葺き寄棟造りの主屋裏側に街道に向けて45坪の家屋が規則正しく並び、家屋の南側は奥の土間入口の通路と作業室を兼ねた二ツである。かつて中央にあった水路は、今もなお街道両側に豊かな水量で流れている。                |
| 千葉県 | 10 |    | 佐原市……佐原市は千葉県の北東部、霞ヶ浦に注ぐ桜川下流域に位置。                               | 商家町・川港(利根川)……周辺農村の中心であり、穀物の集積、商業、醬・醤油の醸造業用の水運とも密接に関連、河港商業都市として発達。             | 木造真壁造、蔵造・塗籠、切妻・寄棟、平入・妻入、平家建・二階建てなど多様な建築様式。  | 利根川支流・小野川とそれと交差する街道沿いの町家や土蔵の町並みと柳並木や荷揚げ場の「だし」等が河港商業空間の二つの景観を持つ町並みである。水路で江戸と直結していることから、江戸の影響を大いに受け小江戸とも呼ばれる。   |
| 長野県 | 23 |    | 南木曾町妻籠宿……急峻な地形に囲まれ、水曾川支流龍川によって形成された小盆地、標高420m前後に立地。            | 宿場町(中山道)……  | 元石置き板葺、鉄板葺に改造、切妻、平入真壁中二階建。表構えは、一・二階の出軒で深い軒、二階両端塗葺。  | 昭和51年9月に妻籠宿が、文化財保護法による日本で最初の「重要伝統的建造物群保護地区」に選定。木曾路には宿駅制度によって11宿あったが妻籠も小さな宿場であった。宿場は南北に貫く中山道に沿って、北から下町・中町・上町があり、枳形を挟んで寺下の町並みが続いている。                        |
| 岐阜県 | 30 |    | 美濃市美濃町……長良川中流とその支流坂取川・片知川などに沿った地域。                             | 商家町……金森長近が小倉山に築城城下を整備。屋敷地は江戸期には道路に面する間口により年貢が課せられた故、間口が狭く奥行き長い短冊状の町割。         | 切妻造り本卯建、平入り、中二階、漆喰塗籠虫籠窓、椀瓦葺、格子、煙出し、オダレ(下層の出軒の下に架け渡される幕をかけるための材)パツリ。                           | 金森長近は一生に3つの町を作った。越前大野・飛騨高山、最後のが上知(美濃)。いずれの町も城を中心に城下町造り、戦いよりも経済を中心とした。上知では美濃和紙の製造・販売による繁栄、伝統的な塗籠造の民家が軒を連ね「卯建」に象徴される町並は江戸から明治・大正及び昭和初期に建築された。               |
| 新潟県 | 36 |    | 津川……下越地方の南東部、阿賀野川が北流し、中央部を北流する常浪川と阿賀野川が合流する河原段丘に位置。            | 宿場町・河湊……会津街道と阿賀野川の水運を結ぶ水陸の中継地・津川船道の起点として繁栄。六歳市が立ち、米と新潟産からの塩、衣類などの交換で賑わった。     | 街道沿い約1kmトンの町並が続く。鉄板葺き、二階建て、真壁、上軒には切妻・平入り、仲町には切妻・妻入りが多く見られる。私有地公共のものとして使うトンは雪の多いこの地方の生活道路。     | 慶長15年大火があり、町中ほとんど消失。津川城主岡重正はこの機会に整備を行った。本町内17軒はすべて板葺しと土葺しを許し、端町は板葺し、売売とも許可しなかった。平板造りという庇をつけた。これが雪国の雁木(津川ではトンプ)だが、会津地方では津川以外つられていない。                       |
| 富山県 | 40 |    | 八尾町……神通川の支流、井田川が平地に流出する山麓に位置する。北に越中平野の村々を望む。                   | 門前町(聞名寺)……洪水により家や耕地を失った人々が、寺のある高台に移住、寛永13年(1636)成立。                           | 元は石置き板葺、椀瓦・鉄板葺きに改造、切妻、平入り形式の二階建て、出軒造。   | 井田川と別荘川に挟まれ細く長く広がる坂の町・八尾。井田川沿いから眺めると崖のような斜面に石垣が積み、その間を縫うように丘の上に向かっていくつもの石段と堀の小道がつつらおりに続く。   |

| 所在地 | 番号  | 写真 | 調査地<br>地理的位置   | 地理・歴史的形態<br>町並みの成立  | 町並(町家)の表構え<br>構成とその要素<br>その他  | 町並みの特徴   |
|-----|-----|----|--|---|---|--|
| 石川県 | 41  |    | 金沢市・茶屋町……卯辰山麓の浅野川沿いに位置。  | 茶屋町……文政三年(1820)近辺に点在の御茶屋を集め町割。  | 元は石置き板葺、椀瓦・鉄板葺きに造り、切妻、平入り形式の二階建て。   | 通りに面して一階を揃いの出格子、背の高い二階には吹抜しの縁側と座敷を備える姿は寛政末期以降の茶屋建築の特徴。茶屋建物の第一の特徴は、弁柄塗り出格子。その細かい格子は「キムスコ」と呼ばれている。京都の影響を受けた「お祭り」や文藝的な繋がりから小京都といわれる。                            |
| 三重県 | 48  |    | 三雲町市場町……重慶の中央部の海沿い、三波川の右岸低地域に位置する。                             | 宿場町(伊勢街道)……蒲生氏郷、天正16年(1588)、二階筋を整備、道沿いに新しく集落を形成。                                | 切妻造、厨子二階建水切り庇付き出格子、妻入、或いは中二階建、平入。椀瓦葺、一階軒庇は瓦葺、幕板付、外壁は押縁下見板。出格子、格子戸。                                    | 敷地の北側の主屋を建て南側に庭を確保。間取りでの共通点は、街道に面した主屋の中央より南側に出入口を設け、その南側に「女中部屋」、その奥に「たごころ・かてり」などの部屋が続く。明治中期から大正初期にかけて市場庄の町家のファサードに大きな変化が起こる。ミセ全面を開放する摺り掛け戸の必要性がなくなり出格子に変化する。 |
| 滋賀県 | 53  |    | 西浅井町・菅浦……琵琶湖北部葛籠尾半島先端に出来た小湾の湾奥にあり背後は急な山腹傾斜面が迫る。                | 漁村集落(琵琶湖)……天皇に食料を献上する賢人が、この浦に住み漁業を営んだのは、平安時代以前とされる。                             | 切妻、妻入り。平入りの混在。浜と居住地区の境に波除石垣。各住戸の屋敷廻りにも浜側に石垣の囲いをめぐらし水害に備えている。  | 中世の頃から自治の村落共同体「惣」を組織。四足門の内側に余所者は住めず、里の者でも道理に反する行為があれば門外へ追放するなど、惣の掟によって厳しく裁かれた。   |
| 兵庫県 | 63  |    | 佐用町・平福……千種川支流佐用川中流域、利神山(山上に城郭)西麓。                              | 宿場町(因幡街道)……利神山上に城郭、街道沿いに町人町を慶長15年(1610)に、現在の地割完成。町並は城下町よりも宿場町、在郷町としての商家が多く見られる。 | 切妻造、平入、本瓦又は椀瓦葺、中二階、白漆喰壁又は土壁、一部裏壁、中二階、虫籠窓、格子、一部煙出し、駒つなぎも残っている。   | 街道の東側の流れる佐用川沿いの石垣の上に建ち並ぶ白壁、土壁の川屋敷。川を渡る、川を渡る、川を渡るには特有なものがある。街道筋の民家軒下を溝に排水が流れる。生活用に利用した上水道の流れで、下水路は上水道の下を横切りにして佐用川に流れていて上下水道を巧みに交差する工法がとられている。                 |
| 岡山県 | 68  |    | 成羽町吹屋……成羽の町から成羽川の支流を北に約9km離れた吉備高原の町(標高約500m)。                  | ベンガラと銅山の町……銅山の歴史は古く、江戸期は幕府直轄の銅山、19世紀前半から弁柄の生産。明治になると三業の所有。一時は日本三大銅山として隆盛。       | 町並みは、古い形式の家屋は切妻下二階をつけた妻入、中二階建て。新しいものは、入母屋造・妻入が主で平入は僅か、二階建て。屋根は石州椀瓦葺。白漆喰壁と弁柄入りの土壁が混在。海風壁、ベンガラ格子。       | 赤銅色の石州瓦とベンガラ色の外観で統一された、見事な家並みが整然と続く町並み。  |
| 鳥取県 | 74  |    | 米子市……県の最西端に位置して島根県に隣接。大山東麓、加茂川の河口中海に面し米子湊を持つ。                  | 城下町(米子城)……慶長6年(1601年)、中村忠一が城主となり、米子城の築城。城下町の整備を行う。                              | 切妻・平入、椀が葺き、中二階建て切妻造で出格子は漆喰塗込造、一階は真壁、千本格子の建込み戸。加茂川沿いには商家の土蔵離れ屋敷が並ぶ。                                    | 江戸期、米子港を中心とした商業の町として発展。港に近い加茂川沿いの町人町には鹿島家や後藤家などの米屋・廻船問屋などの豪商の屋敷が立ち並び繁栄していた。  |
| 広島県 | 79  |    | 福山市……福山市の南部、沼瀬半島の先端部に位置する。背後に急峻な山をかかえるた波静かな入江に面す。              | 港町……江戸期には上関、蒲刈、牛窓、鞆など西回り航路の最重要港として栄える。明治以降交通手段の変化と共に衰退。                         | 間口が1間半〜2間と狭く深い奥行きを持ち、隣家と外壁を共有する独特の構成例も見られる。一方で切妻・入母屋、平入・妻入が混在し、それぞれ本瓦葺の重厚な商家と、多様・多様な家屋がみられる。          | 碓の町並みとして、江戸期の建物約80棟残されている。町は歴史資料館のある小高い丘より南側に古い港町。港町特有の細い路地が入り組み、路地に面しては間口の狭い家が続き、独特の町並みを作り出している。  |
| 徳島県 | 85  |    | 脇町 南町……徳島県西部に位置し吉野川の中流域北岸に位置する。                                | 在郷町……江戸期整造が阿波の代表的産業、陸上交通と吉野川の水運に恵まれた碓町は藁の集散地として栄えた。                             | 伝統的な町屋、22/50戸が、間口四間半以上。敷地の奥行きは深く、80m以上を超えるもある。切り妻造・入母屋造、平入・妻入が入り混じる。本瓦葺、中二階、塗喰の虫籠窓、格子、出格子、本瓦葺棟・鬼瓦付袖建。 | 近世に発達した吉野川中流域の在郷町として、江戸時代中期以降の町家遺構が多い独特の重厚な意匠の町並みを残し、特色ある歴史的環境を形成。町並みの中心は南町で東西の通り430mに矩形地割りで、切妻造・平入、街道に向かって鬼瓦を乗せた特徴的な柳屋形の町家が連なる。                             |
| 高知県 | 88  |    | 室戸市吉良川……高知県東部に位置する吉良川町は、江戸時代に高知から室戸に至る浜街道沿いに形成。寛政6年(1794)には整う。 | 在郷町……明治〜昭和初期の間、良質の木炭集散地として繁栄。街区の旧街道の拡張計画は住民の反対によりパイパスを建設、町並みを保存された。             | 町並みは、中二階建、切妻造・平入、椀瓦葺、漆喰塗喰虫籠窓。外壁は下見貼り、水切り瓦、海風壁の区別。商家には玄間扉に閉じれば雨戸、開ければ広縁になる上下開き板「ぶつちよう」がつく。             | 築落は、海岸に近い下町地区、山側の微高地の上町地区よりなる。下町は、東西に幅員2〜3間の旧土佐街道に沿って南側に短冊型敷地(間口4〜5間)の両側町。隣家と間に屋根の無い3尺〜1間程度のトオリニワがつく。上町地区は細い路地と屋敷の両面に「いしくろ」と呼ばれる石垣塙を巡らした農家型の地割りで方形である。       |
| 愛媛県 | 91  |    | 内子町八日市種田……四国山地から西流した種田川と中山川及びその支流鑓川が町域の内山盆地で合流。                | 木郷の町……文久年間白銅製で、飛騨製に発展。最盛期の明治中期には、国内の主要生産地となる。                                   | 入母屋・切妻が混在。平入、漆喰塗喰虫籠窓、海風壁、彫物付き格子、幾帳の壁。椀瓦葺、節戸、バッテリー。  | 浅黄色と白漆喰の塗喰葺の重厚な外壁。平入造りで、路地に連続した壁面が際立つ。ここでは見られない隣家との間の小路や水路による路地空間、外壁の漆喰塗にさまざまな幾帳が鮮やかな色調で描かれ往時の繁栄を偲ばせる町並みである。   |
| 高知県 | 94  |    | 日向市美々津……耳川の河口に位置   | 港町……集落構成の成り立ちが詳らかでないが元禄2年(1689年)頃には、現在と同規模の集落が成立している。                           | 妻入、平入の混在。土蔵造、虫籠窓、格子窓、一階に出格子、腰格子、パンコ(床几)、二階に海風壁と漆喰の戸袋。正面庇の前部両面に漆喰塗の戸袋。家の様式は、時代や町内での性格を反映して多岐なる。        | 耳川の河口に位置する港町で江戸時代には高鍋藩の商業港。地区は上・中・下町に分かれる3本の主道路やツキまねと呼ばれる防火路など昔の区割りが残り、幕末から明治、大正、昭和期の町家が混在。  |
| 佐賀県 | 98  |    | 鹿島市・浜津地区……浜宿に隣接する浜川河口に位置し有明海に通じる漁港。北は有明海に面する。                  | 漁村集落……長崎往還に面した両側町の庄屋・金屋地区と、河口に対応した魚津の漁村地区とに分かれる。                                | 魚津地区は平屋及び中二階建てが多く、街道筋は中二階及び二階建てが多くみられる。屋根の形式は入母屋及び寄棟、平入、葺葺、下部分は瓦葺。                                    | 浜川を挟んで北河津、南河津と呼ばれ、漁民の家は川に面して形成された街道に面した町並みは河川改修のために大面積に解体され川に面した景観は失われた。船津の集落は千石等によりかなり内陸に造り出されたが、浜川の南岸にある地区には、茅葺、葺葺の民家が今も僅かに残っている。                          |
| 福岡県 | 101 |    | 吉井町・筑後吉井……耳納山北麓から筑後川左岸にかけて位置し、中央を巨瀬川が流れる。                      | 在郷町……商品作物の集散加工を営む在郷町として、明治期には「屋敷屋」が立ち並び豊かな商業都市として発展。最盛期の大正期にはほぼ現在みる町並み形成。       | 町家型……入母屋造、妻入、土蔵造、白漆喰塗、親目板張壁障壁又は海鼠壁、2階付付窓、鉄扉、1階は指上げ戸、格子。屋敷型……敷地間口広く、矩形、周りに寄・廻、は門を構え、袖籠の配置もある。          | 豊後街道沿いに漆喰塗の重厚な外壁が特徴的な町並みと災除川と南新川沿いに広がる屋敷群。明治2年の大火を契機として、草葺きの町屋にかわって瓦葺き屋敷造が普及し始め、大正期に入って重厚な町家が立ち並び景観が完成。  |
| 沖縄県 | 103 |    | 那覇市金城……沖縄本島首里城南の北斜面に臨む。地名は意味的。城下の村を意味する。                       | 城下町(首里城)……尚真王の時代(1477〜1526)に首里城から南部への主要道路として整備。                                 | 金城町は、かつて王朝に勤務する士族たちの住む城下町。道路沿いに方形の屋敷割りによって形成されている。その道路は、琉球石灰岩を用い、石の表面に刻みをつけて滑らない配慮がされている。             | 昭和二十年の沖縄戦当初焼夷弾によって焼き尽くされ、遺物のない裸の町となる。そのため日本製の隠れた場所がなくなくなり、その後の空襲による破壊を免れ、焼け跡に琉球石灰岩の石畳と石積み風の風敷肌合いの石垣が残され、再建された赤瓦の家並みが昔の面影を伝える。                                |

【参考文献・資料】『角川日本地名大辞典』角川書店、『スーパー・エニカ2003』小学館、『日本民族語彙辞典』日本建築学会民族語彙辞典編集委員会編・紀伊国屋書店、『横川村教育委員会編・横川文化財散歩』横川村教育委員会編、『続探訪・奈良井宿』町家点描 藤島玄治郎・藤島幸彦・学芸出版、『風土の意匠』浅野平八著・学芸出版、『大名の日本地図』中嶋繁雄著・文芸春秋、『茶屋宿』小寺武久著・中央公論美術出版社、『中山道69次を歩く』岸本豊著・信濃毎日新聞社、『上撰の旅』シマクラフ編集・昭文社、『京都・建築と町並みの道伝』山本介著・建築資料研究社、『京町家・千石のみみ』高橋康夫著・学芸出版社、『蔵』高井潔著・淡交社、『佐原の歴史散歩』島田七夫著・たまし出版、『瀬戸内の町並み』谷沢明著・未来社、『竹原市伝統的建造物群調査報告書』竹原市、『日本の町のみみデザイン』益田史男著・グラフィック社、『中国地方のまち並み』日本建築学会中国支部、中国地方まち並み研究会編著・中国新聞、『土佐の町並み』高知新聞社編集委員会編・高知新聞社、『町家と町並み』福垣三責任編集・世界文化社、『日本の伝統美とヨーロッパ』宮元健次著・世界思想社、『歴史の町並み研究重要伝統的建造物群保存地区編集』吉田桂二著・東京堂出版、『別冊太陽・日本の町並み1(近畿・東海・北陸)』三沢博昭・小野吉彦監修・平凡社、『別冊太陽・日本の町並み2(中国・四国・九州・沖縄)』三沢博昭・西川幸夫監修・平凡社、『別冊太陽・日本の町並み3(関東・甲信越・東北・北海道)』三沢博昭・西川幸夫監修・平凡社、『別冊太陽・京都』吉田幸治監修・平凡社、『肥前浜野・鹿島市浜宿伝統的建造物群保存対策調査報告書』鹿島市教育委員会、『愛媛県内子町伝統的建造物群調査報告書』内子町八日市周辺町並み保存対策協議会編、『建築家秀吉』宮元健次著・人文書院、『日本 町の風景学』内藤 昌著・草思社、他